

〔国際会議開催〕

申請者	慶應義塾大学 理工学部 准教授 大澤 博隆	2255002
国際会議名	The 13 th International Conference on Human-Agent Interaction (HAI 2025)	
会議ホームページ URL	https://hai-conference.net/hai2025/	
開催期間	2025 年 11 月 10 日（月）～ 2025 年 11 月 13 日（木）	
会場名称	慶應義塾大学 日吉キャンパス（協生館・来往舎）	
会場住所	神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1-1	
開催形式	現地開催	
申請者の役割	General Chair（実行委員長）	

〔国際会議の概要〕

HAI 2025（第 13 回 Human-Agent Interaction 国際会議）は、ロボット、ソフトウェアエージェント、生成 AI など「人間と社会的エージェント（Human-Agent）」の相互作用を対象とする国際会議であり、人間中心のインタラクション設計、倫理的・社会的課題の解決、新しい協働形態の創出を含む学際的研究成果を議論・共有する場である。申請書で述べたとおり、AI エージェントが社会に組み込まれる局面において、人とエージェントの協力的関係の設計を探ることは、貴財団の趣意「人間と機械の調和の促進」と整合する重要テーマである。

本大会はテーマを“Interaction and Imagination（相互作用と想像力）”とし、生成 AI 技術の社会実装フェーズにおける「人間と AI エージェントの共創」や「人間の想像力の拡張」を中心課題として位置づけた。会期は 2025 年 11 月 10 日（月）～ 13 日（木）、会場は慶應義塾大学（日吉キャンパス／来往舎・協生館）とし、現地開催（in-person）で実施した。空港・首都圏主要拠点からのアクセス性にも優れ、国際会議参加に適した立地で運営できた。プログラム構成として、11 月 10 日にワークショップ（6 件）を配置し、11 月 11～13 日に本会議を開催した。基調講演は 3 件（例：Youichiro Miyake／三宅陽一郎、Henny Admoni, Judith Masthoff）を実施し、加えて招待ゲストによる企画も組み込み、学術発表だけでなく、分野の広がりを感じられる構成とした。

本会議の発表形態は、オーラル発表・ポスター等により、多様な研究成果が交流できる場として慶應義塾大学協生館・生成 AI ラボを確保した。さらにコーヒープレイク、レセプション、バンケット（ボカロイドプロデューサーによるライブパフォーマンスを含む）を設け、研究交流とネットワーキングを促進した。運営体制は、ジェネラルチェア（大澤博隆・Helena Lindgren・Aaron Steinfeld）およびプログラムチェア（Mary Ellen Foster・岡田将吾・Haiyi Zhu）を中心に、Local/Workshop/Poster/Publication/Design/Web/Sponsor 等の各 Chair を配置し、国際的な実行委員会体制で推進した。併せて、スポンサー各社および協力機関の支援を得て円滑な開催を実現した。なお HAI は、2006 年に慶應義塾大学を起点とする HAI シンポジウムの流れを持ち、2013 年以降は国際会議シリーズとして継続してきた。本大会は「20 年を経て HAI が慶應に戻る」という文脈も共有され、分野の節目として象徴性のある開催となった。

〔開催の目的・意義と得られた成果・効果〕

本国際会議の開催目的は、ロボット、ソフトウェアエージェント、生成 AI 等が社会に浸透する中で、人間と知的エージェントが調和的に共生するための設計原理・実装・評価方法を、学際的な観点から議論し共有することである。

会議の意義は以下の通りである。HAI の学術的特徴は、「エージェント」をロボットや仮想キャラクターに限定せず、AI エージェント／ソフトウェアエージェントを含む幅広い対話主体を対象とする点にある。このため、対人コミュニケーション研究、ロボット研究、認知科学、AI 研究などが融合し、従来の HRI（ロボット主体）、CHI（インタフェース主体）、IVA（仮想エージェント主体）と相互補完しつつも、より横断的な議論・方法論形成が進むことに独自性がある。

本大会では、説得対話・社会的影響、情動調整、人格化、健康・福祉支援、身体性・マルチモーダル、実環境相互作用、LLM を用いたマルチエージェント推論／オーケストレーション、信頼・公平性・倫理的意思決定など、現代的な論点が幅広く扱われ、生成 AI 時代の HAI 研究の射程を国際的に提示する機会となった。

プログラムチェアによる運営の下、投稿論文は 129 件（21 か国）と、HAI 史上最大規模の投稿を達成した。査読は 38 名の PC メンバーと 179 名の査読者の協力により実施され、トピックに基づく割当、2 名の PC（1AC/2AC）配置、メタレビューによる総括とスコアリング、境界スコアの論文の精査など、透明性と公平性を重視したプロセスで採否判断を行った。その結果、オーラル発表（36 件）・ポスター（72 件）等の多様な発表形態で最新成果を共有し、研究の国際的可視化とコミュニティの活性化に貢献した。

得られた成果・効果は以下の通りである。

- ①国内外研究コミュニティの連携強化：現地開催により、セッション発表・ポスター討論・休憩時間の対面交流を通じて、学際研究者間の協働の芽を多数生み、国際ネットワークの接続を強化した。
- ②若手研究者・学生への国際発表機会提供：ポスター／デモを含む発表機会を広く設計し、若手研究者が国際的なフィードバックを得られる環境を整備した。特に、ワークショップの併設や多様なトラック構成により、研究成熟度に応じた参加・発表の導線を確保できた。
- ③日本企業による最新技術デモと産学連携促進：スポンサー企業の協力を得て、会議運営および交流機会（レセプション・バンケット等）を通じて産学接点を強化し、共同研究・社会実装の具体的な連携機会の創出につなげた。

申請書で掲げたとおり、横浜（アジア太平洋地域に開かれた立地）での開催は、周辺地域からの参加も促し、研究ネットワーク拡充に資する形で実現した。さらに、史上最大規模の投稿・参加を背景に、人工知能分野における日本発の HAI 研究の国際的プレゼンス向上に寄与したといえる。

本会議の成果は動画で発表した。

<https://youtu.be/dKUCOQtthZU>